

# ピアノ

結城 文

トルコマーチのピアノの音色が  
明るい木洩れ日のように降りかかった  
暖かい潮のように押し寄せた  
青く凪ぐ海の果てからのように  
遠く過ぎ去った時代からの波のように

かつてリビングで響いていた音  
上の子が弾き

下の子が弾いたピアノは  
ある時から鍵盤に触れられることもなくなつて  
マホガニーの光沢も曇り  
それでも家族の言葉をききながら  
三十年 いや四十年以上ともに在った

そのピアノをとうとう手放した――  
家移りをする私には  
もう一緒に存在するためのスペースを確保できなくなつて

そんな矢先のピアノの発表会  
彼方から娘たちのソナティネがよみがえる  
練習を強いたかつての私がいち  
不意打ちのようにきた潮は  
私を包み

きらめきながら引き  
また寄せる  
忘れていた感覚にとまどう私をよそに  
プログラムはよどみなく進行していった